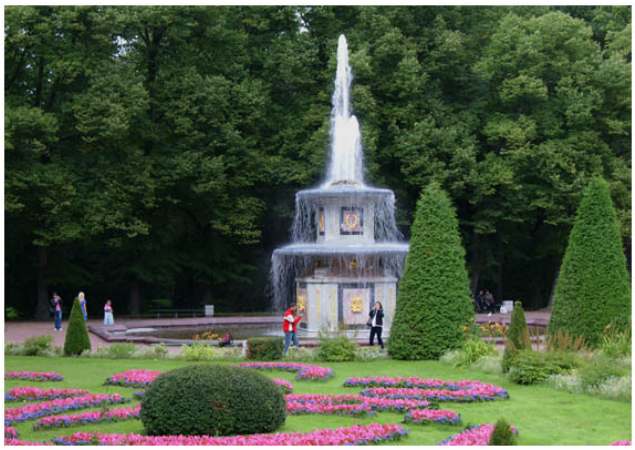


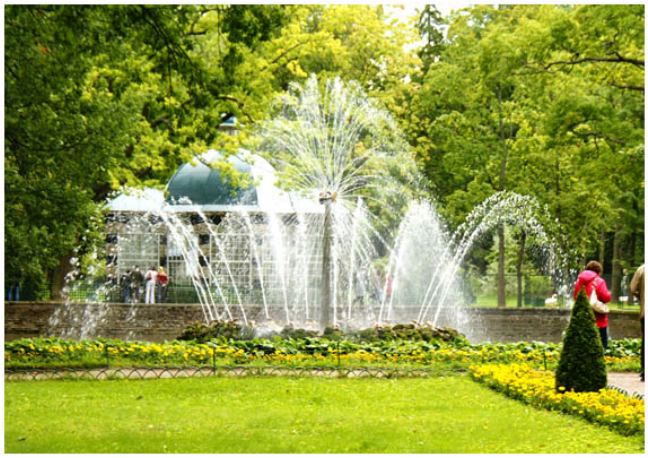
写真－8　ローマの噴水

写真－9　フランスの噴水

大滝の少し東にある噴水で，運河を挟んで対の位置にイタリアの噴水がある。

○太陽の噴水１

噴水が柱の上から球体のように放射状に吹き出していて，太陽をイメージしている。噴水全体がゆっくり回転していて太陽の動きをあらわしているようである。



写真－10　太陽の噴水
球状に見える

○樫の木噴水

木の形をして，枝の至る所から噴水が

○いたずらの噴水

普段はちょろちょろで人が上に来ると突然吹き出したりして，濡らしてしまう噴水。人の動きに合わせて動く。よく見ると噴水の近くにベンチがあり，そこにジャンパー姿の男が座っていて，足下に小さなレバーがあって，人の動きに合わせて足で操作していた。

ガイドブックを見るとこのほかに，チェスの山の滝，ピラミッドの噴水，小さな宮殿などが庭内に散在している。

写真－11　樫の木の噴水

6. 大宮殿

段丘の上に立つ最初の大宮殿は1714年に建設が始まり，1721年にできあがった。当時は２階建てで大きくなく，宮殿群の一つと考えられていたようである。大帝の娘である女帝エリザヴェータの時代に３階建てのバロック様式宮殿に改装され，その後代々の皇帝が改

写真－12　モン・プレジール宮殿横の噴水

装して今の姿になった。大きくはないが，中はけっこう豪華である。宮殿は何故か写真撮影禁止になっていた。ロシアでは通常撮影料を取っているところが多いが。前にいたのがクルーズ客船の団体で（二桁にもなる番号札を掲げているのでだいたい分かる），撮影許可の契約だったらしく，撮影が認められていた。水辺の写真撮影がテーマで，建物内の写真は殆ど使わないが，少し残念であった。顔つきが同じであったら，紛れ込んで撮れたのに。

7. モン・プレジール宮殿

湾のほとりに建つ，離宮建設の初期につくられた宮殿で，フランス語で「お気に入り」を意味する。大帝は湾を見渡せるこちらの宮殿にいることが好きだったようである。建物は海側はオランダコロニアル様式で，陸側はフランス式になっている。

写真－13　チェスの山の滝
段丘を利用した黒白模様の斜面の薄流。
ローマの噴水のすぐそばに。前で音楽演奏。

8. マルリ宮殿

遠いので行けなかったところである。東西の二つの池に囲まれたバロック風２階建ての小さな建物で大帝のゲストハウスとして建てられた。大帝が1717年，パリに滞在したときの館，マルリ・ル・ロアンに由来する。マルリ宮殿から東に道路が延びていて運河を橋で超え，東の端まで行っている。その途中にイヴの噴水，アダムの噴水それから大帝の像が配置されている。またマルリ宮殿から海沿いと丘沿いに放射状の２本の道路が延びていて，海沿いの道はモン・プレジール宮殿にまた，丘沿いの道はローマの噴水のある広場に至る。ローマの噴水とモン・プレジール宮殿を結ぶ道の中間点の広場に大帝の像があり，そこがマルリ宮殿から東に延びる真ん中の道路との交点となっている。マルリ宮殿，モン・プレジール宮殿，ローマの噴水を結ぶ軸線が庭園の基本になっているようであり，幾何学的なフランス式なのであるが，樹木が伸びすぎたせいであろうか，あまり整然とした感じがしない。

9. ピョートル大帝

身長が２m13センチもあったピョートル１世（1672年－1725年）はロシア最初の皇帝となったがその道筋は難しいものであった。1676年に父アレクセイの死後，跡を継いだ異母兄のフョードル３世がすぐ死去（1682年）。後継をめぐって内乱などがあり，14才年上の異母姉のソフィアが幼い二人の弟である，ピョートルと異母兄イヴァンの摂政となり実権を握った。摂政政権は進歩的な政策をとるなど内政外交を良好に治めていたが，クリミア遠征の失敗から支持が失われ，ピョートルが実権を握ることになった。しかし，当初は国政を母などに委ねて，昔なじみの外国人村を訪問したり，オスマン海軍との1695年の戦闘に砲兵下士官として参加したりしていた。この頃，海軍創設に着手し，造船所を建設して短期間に艦隊を造り，1696年のトルコのアゾフ遠征でも乗船し，この時はロシア軍の水陸共同作戦によりアゾフが陥落し，ロシアが黒海への出口を手に入れることができた。

1697年には250名の使節団をヨーロッパに長期派遣したが，自分自身も偽名を使って一員となった。アムステルダムでは造船技術の習得に専念し，東インド会社の造船所で船大工として働いた。また病院，博物館なども視察見学したが，歯科医療に強い興味を示し，初歩的な抜歯術の手ほどきを受けて，医療器具を買い込み，帰国後，臣下たちの虫歯を麻酔なしで抜くのを趣味としていたという。一国の長でありながら，職人のように手を動かすのが好きで，いろいろな工芸作品もつくったようで，夏の離宮を建設するにも図面まで書いたことが分かるし，具体的ないろいろな思いがあったのだろう。

サンクトペテルブルグに首都を建設することを決めたのもピョートル大帝であるが，ネヴァ川の河口デルタで地盤が非常に悪く，石造の建築の基礎工事が大変だったので，離宮の所くらいが良かったとも思うが，やっとバルト海への出入り口を確保できた状態では他の選択はなかったのかもしれない。

スウェーデンが支配していた北方海域に進出するこ

写真－14　エカテリーナ宮殿の伊万里焼装飾
ツァールスコエ・セローにある宮殿の階段の白壁には伊万里焼の皿，壺，花入れが装飾として飾られている。

とは，苦難の連続で，オスマントルコを巻き込み，アゾフを返還させられたり一進一退でやっと可能になった。この功績により，皇帝の座に着くこととなった。

大帝は最後も変わっていて，座礁した船の救出作業で真冬の海に入ってから体調を崩して重い膀胱炎となり，それがもとで1725年１月末に52才で死去。

10.　日本語ガイド

ツアーの現地ガイドであるが，通常，現地ガイドが英語（スペイン語の時もあった）で説明し，添乗員が翻訳するのが多いが，ロシアでは現地ガイドは皆立派な日本語で説明していた。けっこう正確に理解できるように説明できるということは相当にレベルが高いことを示している。ガイド補助もまあまあ話せ，聞いたら日本語学科の大学院生であった。モスクワではモスクワ川のクルーズ船に乗りたかったので，半日単独行動して現地ガイドをお願いしたが案内してくれたのはリタイア世代の日本語を話せる人で語彙も多かった。ユーラシア旅行社のツアーであったが，他の旅行会社に聞いてもロシアでは，現地ガイドは大体日本語を話せるそうで，日本語学科で学ぶ人々が多いようである。学習レベルも高い。折角難しい日本語を習得したのだから，努力が役に立つようになってほしいものである。

11.　終わりに

大滝の運転は５月から10月中旬までと短い。これだけ規模の大きい水景観が何故寒冷の地につくられたかということがある。しかし，太陽の豊かな，暖かい地方であったら，これだけの水を得ることは難しく，北国だからできたのだろう。

動力ポンプや水圧に耐える管材がなかった時代に，大規模な噴水システムの最適な場所を選んで成功させたことには感動する。

エルミタージュ美術館の前はネヴァ川の河口の広い水面が広がっているが，対岸近くに大規模な噴水があり，夜はライトアップされていた。

写真－15　噴水ライトアップ（サンクトペテルブルグ）
音楽に合わせて様々に変化。ネヴァ川のこちら側，エルミタージュ美術館近くから。